



戦争を知らない世代へ ㊥ 北海道編

# 望郷の島々

千島・樺太引揚げ者の記録

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ ㊟

望郷の島々——千島・樺太引揚げ者の記録

---

昭和51年9月1日 初版第1刷発行

編者◎ 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

振替 東京5—117823 03(294)8731 (代)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社星共社

---

落丁・乱丁本はおとりかえ致します 0036—7026—4438

## 発刊の辞

創価学会青年部は、昭和四十八年二月十八日に行われた第二十一回男子部総会、つづく女子部総会、学生部総会（三月十一日）で「生存の権利を守る青年部アピール」を採択した。その第一項に「核兵器および一切の軍備を地球上から消滅させ一切の戦争を廃絶する」と謳われている。

この全人類が希求する理想に向かって、あくまでも生命的ヒューマンイズムの立場を堅持し、生存の権利を守る運動が各地で着実な進展を見せているが、北海道青年部でもアピールに基づく平和活動を推進してきた。とくに、昨年の長期にわたる憲法講座では現行平和憲法を貫く恒久平和主義など、憲法の三大原理を守り抜くことこそが、反戦平和運動の支柱であることを学び、平和憲法擁護の機運がひたひたと浸透している。

また、西アフリカ飢饉救援、ベトナム救援募金を実施し、日本ユネスコ協会連盟に委託したことも特筆できよう。

さきに出版した『北の海を渡って』―樺太引揚げ者の記録―も反戦運動の一環として手がけて

完成したものであったが、関係者はもとより、戦争を知らない世代から賛同の意が表されて幸甚に耐えない次第である、

さらに今回、統編ともいうべき『望郷の島々』―千島・樺太引揚げ者の記録―を発刊するに至ったのも道内外に居住する引揚げ体験者の生の原稿が積み重ねられたからであった。その一言一句は自分の過去をいたずらに回顧したものではなく、痛恨の戦争体験を二度と繰り返してはならないという生命の奥底からの叫びであり、社会的責任のうえから世の後継者に真の平和の意味を問いかけた『平和願望書』といえよう。世の歴史、国を問わず、名言、格言は幾多とあろう。だが、著作者が訴える「戦争はいかなる不幸よりも残酷で悲惨」という言葉こそ永遠に忘れてはならない万国共通の言葉ではないだろうか。

戦後三十星霜。ともすると風化しつつある戦争ではあるが、本書によって過去の暗い歴史を、未来の明るい歴史を作るうえに何らかの示唆が与えられればこのうえない喜びである。

最後に、取材及び編集作業に尽力を惜しまなかった「北海道反戦出版委員会」のメンバーの方に厚く感謝の意を表するものである。

昭和五十一年八月十五日

創価学会青年部

北海道男子部長 佐藤好弘

# 目次

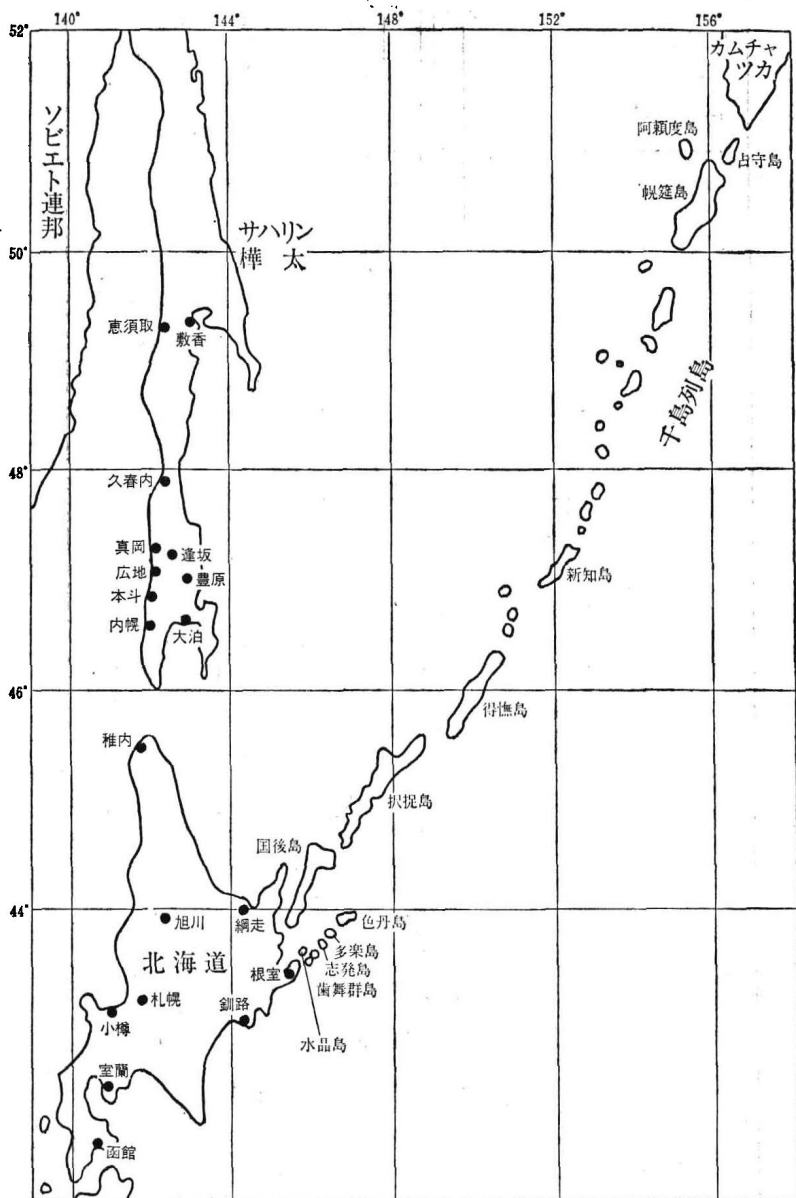
## 発刊の辞

### 第一章 樺太の空をみつめて

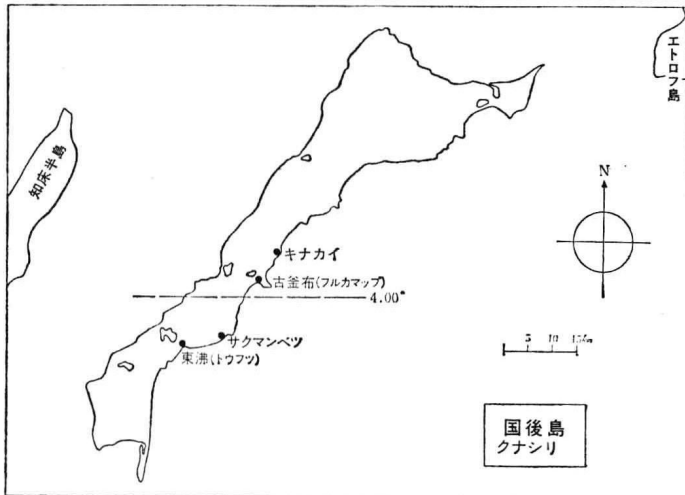
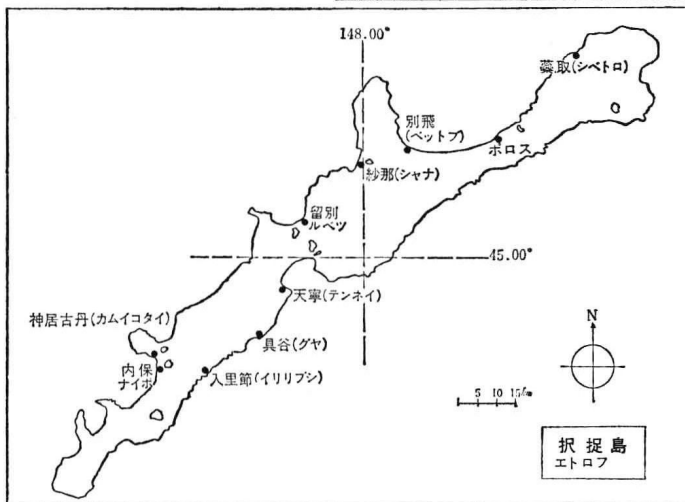
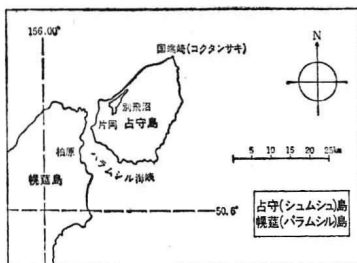
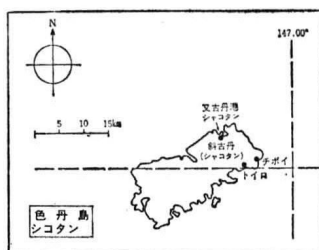
|                          |        |     |
|--------------------------|--------|-----|
| いつ引揚げられるのか.....          | 繁在家ナミ子 | 8   |
| 空しき白旗.....               | 高津信行   | 14  |
| 我が密航の記.....              | 山崎由太郎  | 20  |
| 戦争に二度出産をはばまれて.....       | 土屋昭子   | 28  |
| スパイ容疑で独房へ.....           | 田村清一   | 33  |
| 樺太とは別れたくない.....          | 斎藤貞子   | 42  |
| 不幸は引揚げ後にはじまった.....       | 宮越弘嗣   | 47  |
| 帆かけ舟で渡った宗谷海峡.....        | 相内はまえ  | 53  |
| スプーンにおもう故郷の樺太.....       | 二上京子   | 61  |
| ソ連軍におびえる大泊.....          | 山木友太   | 66  |
| 魚雷命中の第二新興丸.....          | 榊川末子   | 71  |
| 最後の稚泊連絡船に乗務して.....       | 菊池勝俊   | 78  |
| <b>第二章</b> さいはての島に別れをつけて |        |     |
| 戦争すんで平和の消えた占守島.....      | 別所二郎蔵  | 86  |
| 四年間シベリアに収容されて.....       | 工藤千代穂  | 94  |
| 引揚げ後に暗転した人生.....         | 阿部 登   | 99  |
| 「非協力者」のレットルをはられ.....     | 志保賢一   | 103 |
| 故郷をわれて.....              | 大伴京子   | 109 |

付章 「平和」の意義を考える

|                     |       |     |
|---------------------|-------|-----|
| 友人のようなソ連兵……………      | 河口きわ  | 116 |
| 屈辱の引揚げ……………         | 長岡孝一  | 121 |
| もうクナシリを出よう……………     | 若松梅子  | 129 |
| 終戦の一年後に銃殺された兄……………  | 佐藤政士  | 137 |
| さいはての防空壕……………       | 中野ますの | 141 |
| 崩れさった自然の楽園……………     | 丹野三郎  | 147 |
| 島よ還れノ……………          | 小泉秀吉  | 151 |
| 島を追われ裸になって引揚げて…………… | 高塚ユキ  | 159 |
| 反戦出版記念会に出席して……………   | 安倍三史  | 164 |
| 『北の海を渡って』を読んで……………  | 前野良久  | 167 |
| 怨讐を越えて……………         | 藤島範孝  | 170 |
| 『北の海を渡って』を読んで……………  | 堀 清   | 173 |
| 『北の海を渡って』を読んで……………  | 斎藤政明  | 175 |
| 『北の海を渡って』を読んで……………  | 武田義巳  | 177 |
| 体験と文章……………          | 小野規矩夫 | 179 |
| 平和に生きる……………         | 本間正信  | 181 |
| 昭和二十年―本斗の夏……………     | 森山孝志  | 184 |
| 『北の海を渡って』の読後感……………  | 渡辺千代  | 188 |
| 『北の海を渡って』を読んで……………  | 金子俊男  | 191 |
| 『北の海を渡って』を読んで……………  | 山崎豊子  | 194 |
| あとがき……………           |       |     |







# 第一章 樺太の空をみつめて

## いつ引揚げられるのか……



繁在家ナミ子

(当時21歳  
逢坂)

私の姉は敷香<sup>シスカ</sup>に嫁いでおり、そうした関係から昭和八年、まだ十歳にならないころ私も樺太へ渡りました。したがって少女から娘にかけての私の青春は樺太とともにあったといえるのです。そして、二十年三月に上敷香<sup>カミシスカ</sup>にて結婚しました。

それからはこの地で新婚生活をおくるようになったわけですが、上敷香に住んだのはほんのわずかでした。私の主人は軍の兵器補給廠<sup>はきゅうしょう</sup>に勤務しており、豊原<sup>トヨハラ</sup>から真岡<sup>マカ</sup>に通じる豊真鉄道の途中にある逢坂<sup>オウサカ</sup>というところへ軍が移動することに決まったからです。それで私たちも、樺太北部の上敷香より南部の逢坂へと移っていきました。たいへん戸数の少ないきびしいところでしたけれど、そこに馴れる間もなくやがて八月十五日。いつものように竹やり訓練が終った直後、玉音放送です。「敗戦」ではありませんか。つい今しがたまで真剣にやっていたあの竹やり訓練は、いったい何だったのかしらと思うと、私の目からは涙があふれるように流れ落ちました。

ソ連軍らしい船が真岡の沖あいに集結している——日本軍からそんな連絡の入ったのはたしか

八月十五日の翌日であつたと思います。ことの真偽はそれから数日後にはつきりました。ポカン、ポカンという艦砲射撃の轟音ごうおんが真岡から逢坂へと響いてきたのです。私はあわてて素足のまま逃げました。ほかの人たちも泣いたり大声でわめいたりしながら逃げまどつています。最初、お寺にかくれたところがそこも危ないといわれて、さらに遠くへ逃げました。そんなこんなでしばらくしたころ気の早い人たちは、一時的に避難するのなしに世帯道具をひとまとめにしての本格的な避難をはじめたのです。でも、私にはこれといった身寄りが数香にしかないので、仕方なくこの日は逢坂にとどまることにしました。

八月二十一日、リュックサックに荷物をまとめ、一人で駅に向かいました。私は本当にビックリしてしまいました。すでに駅には、人がすずなりに並んでいたのです。やっとの思いで汽車に乗り込んだものの、飛行機の機銃掃射を警戒しているのです、その汽車はなかなか豊原のほうへ進みません。清水しみず、中野なかのとすぎて二十五キロぐらい行ったところで完全にストップ。列車でこれ以上はもう危険だとのこと。山中のどこからともなく射撃の音が時折り聞こえてきます。こうなつたからには自分の足だけが頼りです。心細いなどと泣きごとをいってはおれません。そして、ここまででも汽車で来られた私は、まだましなほうでした。はるか北の恵須取エス・トルの方面から逃げてきたという人がたくさんおり、その人たちのなかには大きな行李こうちを背にし、さらに小さな子供たちをヒモでつないで歩いているお母さんの姿であつたのです。お母さんが苦しければ、子供もま

たさぞかし苦しかったことでしょうが、でもその子供たちは運がよかったのです。夜になると山道のあちこちで、捨てられ置きざりにされた子供が泣いていたのです。しかも、なおさら痛ましいのは、その声の弱々しかったこと。ふつうの時なら、子供はありったけの声をはりあげて泣くものなのに……。長い避難の道中をろくなものも食べずに休む間もなく進みつづけ、ためにすっかり衰弱しきってしまったそのあげく、無残にも捨てられていったにちがいない、これが戦争です。戦争とはこうしたものなのです――。

その私は、あまりの空腹と疲労でついに意識不明となってしまう、やっと気がついたときは豊原の女子学校に収容されていました。しだいに元氣を取りもどしてから、北海道へ渡ろうと大泊オホトクリへ行きました。知っている人は……。そんな人など一人としておりません。トボトボ歩いていると、頭上に飛行機が。てっきり日本の飛行機だと、皆で歓声をあげているとどうでしょう。おおぜいが集まっているところに、爆弾が撃ち込まれたのです。私も爆風で吹っ飛ばされ、ポストにぶつかり、もう夢中になって防空壕へ駆け込みました。なおも機銃掃射の音はつづき、生きた心地も、北海道もありはしません。ようやくソ連機が去って外へ出たところ、着物はちぎれ飛び、傷つき血だらけとなった人が狂ったように泣き叫んでいました。

ソ連軍は私たちの引揚げを止めさせようとやっきだったのです。そのために大泊へ集まった人びとに機銃掃射をしたのでしょう。そうしたことあつてか、私の引揚げはだめになりました。

八月二十三日を最後に、引揚げ船が出なくなったからです。

私の引揚げ許可がおり真岡の収容所へ移ったのは、それから二年もした昭和二十二年九月でした。これで北海道へは確実に帰れることになったわけですが、その日というのがなかなかめぐってこないのです。収容所にて帰国の受付の開始を今か今かと待ちのぞみました。やっととはじまったと聞きつけて事務所へ飛んでいくと、すでに定員に達して受付は終り、それからまた四十日も待たねばならないのです。運よく私に先んじて船に乗れた人を見おくり、真岡の港へ何度でかけたことか。「さようなら。お先に」と振る手を見ながら私は無念さと切なさで今にも気が狂ってしまいそうでした。

引揚げの時をただじっとして待ちつづける日々……。小さな長男をかかえる私にはとくに辛い毎日でした。なんの火の気もない収容所ではオシメを洗ってもなかなか乾かず、寝るときにオシメを下にして乾かしたものです。食事でもまたひどく、母親の私が栄養不十分とあってお乳がでないのです。十回も吸ったら止まってしまうのです。こんなことでは長男が死んでしまうと、米をすりつぶしてあたえてみるもうけつけません。どうにか口にしたかなと思えば、すぐに下痢をおこす始末。お乳がほしいと火のように泣きじゃくる我が子を抱きしめ、この私もオイオイ泣いてしまいました。このほか忘れられないのはトイレのものがすごく深かったことです。そこに木が二

本渡されてあるだけで、子供や老人が落ちて死んだこともあるくらい。綱につかまってもフラフラ目まいがしてどうしようもなく、真っ暗な夜など、とても行く気にはなれませんでした。

こうして私の引揚げの日は、真岡収容所に入ってから二カ月後になってしまったのです。願ひかなって船に乗ったときは無性にうれしく、いいあらわせない喜びが込み上げてきました。が、何年ぶりかで味わったバラ色の喜びもどこへやら、今度は海がシケです。ほとんどの人は船酔いで横になって寝たつきり。すこしは具合がよくなったところに配られた食糧といえ、真岡収容所とどっこいどっこのイモのくさったようなものばかりでした。

今になってあの当時を振り返ってみますに、きまってしまうのは昭和二十年の終戦からの辛く悲しい多くの出来事なのです。真岡の港をおおぜいの人びとを乗せた引揚げ船がだんだん小さくなり、消えようとしています。それをいつまでもいつまでも、無念やるかたない気持ちで見送っている私——こんな夢を三十年が過ぎようとしているいまだにみて、私は夜中にハッと飛び起きることがよくあります。

最後に自分自身の誓いとして書きましょう。これからの将来、もし日本が戦争になろうとしたら、私はこの斜里シヤリの町にブラカードを持ち、たった一人でもいいから戦争反対を叫んでいく決意でおります。

## 第一章 樺太の空をみつめて

\*

昭和八年、敷香に渡る。同二十年三月、上敷香で結婚し、やがて逢坂で終戦。同二十二年九月に引揚げが許可されてより二カ月間、真岡収容所で送る。現在、斜里郡斜里町在住。五十二歳。



空しき白旗——樺太新聞の記者として



高津信行（当時25歳  
豊原）

昭和二十年八月二十二日、この日、豊原の街は雲ひとつない快晴であつた。本来なら爽やかな日本晴れというのであろうが、人びとの心は暗く閉ざされ重く沈んでいた。

街の建物という建物の屋上や屋根、そして戸口に、湖の漣にも似てひらひらとはためく白旗——それは市役所から幹旋された布によって終戦の八月十五日から掲げられた白旗であり、文字どおり降服を意味している。その日以来、私の勤務する樺太新聞豊原本社には数かぎりない悲報がつぎつぎともたらされた。北部奥地では婦人がいたずらされたあげくソ連兵に射殺されたとか、もはや逃げきれまいと観念した親子が自害したとかはそのごく一例であり、新しいところでは二日前の八月二十日、真岡に上陸したソ連軍が戦端をひらき、民間人多数が射殺され、郵便局の電話交換手たちは思いあぐねた末に薬物をあおって自決をしたらしいなどの生々しい情報が入っていた。

当時の方針として新聞社ではこれらの悲報を努めて伏せるようにしていたが、終戦後、直ちに